



川越城の太鼓

川越市内石原町の本應寺には、川越城の太鼓が伝えられています。太鼓の胴には、「川越城主松井周防守／城中鼓樓ニアリシヲ／故アリテ當山ニ奉獻スル者也」と記されています。奉納者は地元の渡辺政方（1843～1919）。政方は家業の水車業を営む傍ら、石原区長や川越商業会議所常議員などを務め、川越ゆかりの画家である橋本雅邦の後援組織「画宝会」の設立にも参加しています。政方が川越城の太鼓を奉納した経緯は不明です。

胴に記してある「鼓樓（鼓楼）」とは、太鼓を設置してある檣のことで、川越城の中曲輪、衆判所の東側に存在しました。『武蔵三芳野名勝図会』を著した中島孝昌（1766～1808）の孫にあたる中島守謙が著した『佐久良能仁保比』（明治20年）には、川越城内のことが詳しく記述されていますが、その中に「太鼓檣」の項目があり、「上層ニ太鼓ヲ釣リテ昼夜十二時ヲ報ズ 傍ラニ半鐘ヲ掛ケ城内ノ失火鐘鼓ヲ打チ交テ警報ス」とあります。そのためこの太鼓は、川越城内に昼夜十二時を知らせた「時の太鼓」だったことが判明します。十二時とは、夜九ツ（真夜中）・

あかつき 曙 八ツ（午前2時頃）・暁七ツ（午前4時頃）・あけ 明六ツ（午前6時頃）・朝五ツ（午前8時頃）・朝四ツ（午前10時頃）・昼九ツ（正午）・昼八ツ（午後2時頃）・夕七ツ（午後4時頃）・暮六ツ（午後6時頃）・夜五ツ（午後8時頃）・夜四ツ（午後10時頃）の十二の時刻です。最後の川越藩主松平周防守家の家臣録である分限帳（明治2年）には、「太鼓打」の名前が記載されており、「時の太鼓」を打つことは正規の職務となっていました。

江戸時代において、城内に時を知らせる太鼓檣が設置されることは一般的だったようです。檣の種類においても、特殊な用途をもつ檣として、太鼓檣の名称が多くの城で確認できます。太鼓檣は通常二重の檣で、二階に太鼓を設置し、その音を響かせるために二階の窓を大きく開くのが通例だったといわれています。

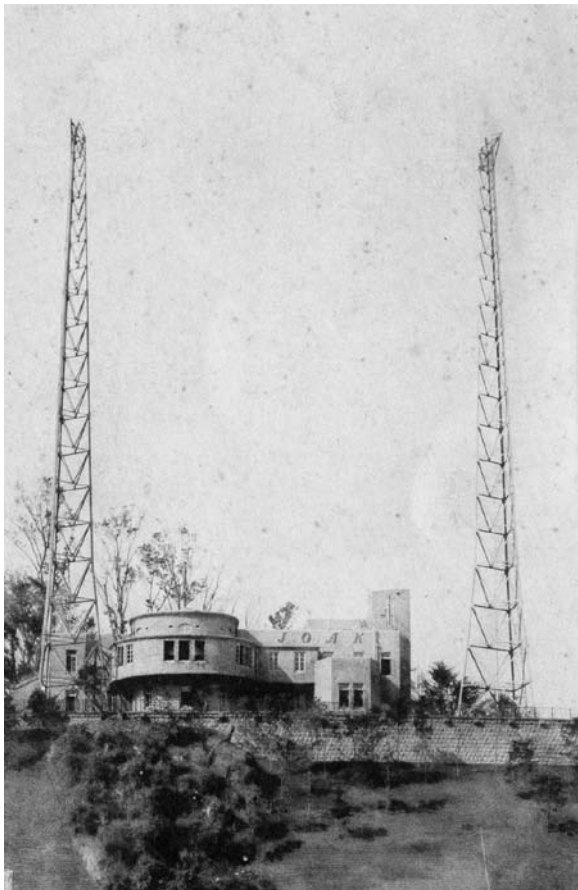
岩手県一関市博物館で開催した企画展「時の太鼓と城下町―江戸時代の時刻と時報―」の解説書（2009年）によれば、全国で「時の太鼓」の伝存数は16、太鼓檣の伝存14・復元8と、その調査結果を報告しています。

同盟通信社川越分室について

元共同通信記者 鳥居英晴

ポツダム宣言から日本の降伏にいたるまでの終戦末期において、日本の運命を決めた外電が同盟通信社川越分室で傍受されたことは、通信社の歴史には記されている。ところが地元の川越を含めて一般には、その事実はあまり知られていないようである。川越分室についての記録はほとんど残されていない。その所在地についても関係者の記述が食い違っている。かねて気になっていたことだが、本格的な調査を始めたのは2009年秋であった。川越市立博物館にも問い合わせたが、資料はないという返事であった。

戦時中、海外情報については、国策通信社であった社団法人同盟通信社（共同通信社と時事通信社の前身）が独占的に扱っていた。外電は当時、モールスの無線電信で放送されていた。東京通信局愛宕山分室が外国の放送や電信を傍受していたが、太平洋戦争開戦の直前の1941年12月6日、情報局によって、同盟が設備と要員を提供することが決まった。



愛宕山受信所

愛宕山受信所が空襲で被災、川越に移転

45年5月26日の東京空襲で愛宕山受信所が被災した。当時、東京通信局放送部長だった柴橋国隆は『通信史話(中)』(62年)の「愛宕山情報局」と題する文章で次のように述べている。

「空襲が激しくなるにつれ、愛宕山も危険の度を加えてきたので、私達はかねて情報受信業務の確保のために、適当な場所を求めて疎開移転の計画を樹てていた。それでも通信連絡、勤務のことなどを考えながら躊躇している私達に、決断を迫ったのは、五月二十六日の東京空襲だった。(中略)その日、愛宕山方面の硝煙を見て単身愛宕山に登った。敵の焼夷弾は分室にも数発投下されたが、幸いにも宿直者の奮闘で消し止めることができた。係員と施設の無事を喜び合ったものの、すでに電源は切れて受信業務を継続することは難しい。一刻も猶予はできない」

通信社史刊行会(現・新聞通信調査会)が58年に出版した『通信社史』は、同盟の正史といえる。『通信社史』は、愛宕山受信所は川越に移転したと記しているが、具体的な場所は記していない。当時、同盟外信部長で川越分室の責任者であった木下秀夫が『文藝春秋』(71年12月号)に寄稿した「陸軍中佐を女にする」と題するエッセイの中で同分室について次のように記している。

「川越傍受所の開設は当時の逋信省と同盟の共同作業で行われ、逋信省からは十数人の無電技官、同盟からは外信部の翻訳係数人に、戦争中も日本に踏みとどまった二世のお嬢さんが三十数人が、ここに勤務することとなった。最後には男女分宿となったが、最初のうちしばらく宿泊設備がなかったので、私たちは美しい二世嬢たちと同じ宿屋で、ざこ寝に近い起居をしていた。(中略)秘密傍受所の開設はすべて極秘のうちに行われた。傍受所は学童の疎開でがらんどうになったある小学校の一棟を借りて、そこに設けられた。(中略)仕事はもちろん二十四時間態勢で行われたが、時差の関係で重要ニュースはほとんど全部真夜中に飛びこんできた。トルーマン大統領の原爆投下声明も、ポツダム宣言も、日本の降伏受諾が先方に届いたことの確認も、その第一報はすべてここでキャッチされた」

川越が疎開地に選ばれたのは、福岡受信所が近くにあったからだったという。『川越市史第五巻』(72年)は「川越市立小学校の教室に同盟通信社が疎開して外国電波をキャッチしていた」、『日本外交史』(72年)も「川越の一小学校にあった」と記している。一方、柴橋は「川越の工業学校」に移転した、と次のように述べている。

「参謀本部、同盟通信の配慮で、川越の工業学校に移転することにした。途中、KDDの上福岡受信所に一台を預け、眼にしみる郊外の緑を感じながら、やっと川越に辿りついた。たまたま学校長が岡田係長の旧師という因縁も幸いして、万事好都合に取運ばれた。学校側は教室の一部を快く提供してくれたので、ここに仮受信室を開設して、その日からまた、遅しい受信業務を始めた。地元川越の市長、警察署も、いたって物解りのよい人達で、業務の重要性を良く認識し、芋、缶詰など食糧の配給に格別の便宜を計らってくれた」

KDDは戦後に設立されたもので、当時は株式会社国際電気通信である。NHK国際局OBの北山節郎は『ピース・トーク 日米電波戦争』(96年)で、「当時勤務した日系二世のお嬢さん達の証言を得られないものだろうか」と記していたが、2007年1月に亡くなった。

『してい・おぶ・かわごーえ』

調査を進めているうち、同盟外信部記者だった武井武夫が、同分室を舞台にした自伝的小説『してい・おぶ・かわごーえ』を書いていることが分かった。69年に書かれたもので、終戦直後に武井が著し同盟から出版された『原子爆弾』の復刻版(95年)の中に収録されている。自費出版のために北山の眼に触れなかったようだ。

武井は一高を中退、日本共産党員として33年に検挙され、入獄する。同盟に入社したのは43年で、外信部では軍事・科学記事の担当であった。『かわごーえ』では、同盟は「連盟」、登場人物も仮名で、武井は「掛井」になっている。分室の所在地は、「廓町の商業学校」としている。その位置については、「川越の中心街を抜けて市役所の横をまがると、商業学校の門が見えてく

る」とあり、分室の道路の反対側に本丸御殿。門を入り、校庭を横切って、右端の教室に分室はあるとしている。

郭町には現在、川越小学校、川越第一小学校、県立川越高校がある。位置関係からすると、川越小学校が一番近いようにみえた。同校に問い合わせたが、資料は見当たらないという返事があった。

「掛井」が利用した旅館が市役所前の「升村旅館」である。松村屋旅館のことであろう。問い合わせの手紙を出したところ、当時の女将の娘にあたる今井松子さんから返事があった。松子さんは同盟関係者が旅館に入りしていたことを覚えていた。松子さんは44年に県立川越高等女学校を卒業、東京家政専門学校へ通うため、東京に出ていたが、45年3月10日の東京大空襲で川越に戻ってきていた。松子さんは昔の記憶をたどりながら、同盟分室は「商業学校にあったように思う」と語った。現在は市立博物館になっている郭町2丁目にあったのだと言う。道路反対側には本丸御殿があり、『かわごーえ』の描写とぴったりと合う。

川越商業学校は、26年に設立された。第2次大戦末期、全国の商業学校は、その大部分が工業学校に転換されることになり、川越商業学校も44年4月1日から、電気通信科を内容とした工業学校に転換した。二代目校長として県立川越高等女学校の教頭であった小熊精一が赴任した。下級生は工業学校生徒、上級生は商業学校生徒となった。これで工業学校に移転したという柴橋の記述と整合性が取れた。終戦とともに、商業学校に戻り、50年に川越商業高校となり、60年に現在の旭町



川越商業学校(可児初男氏提供)

に移転、2002年に市立川越高等学校に改称した。

同校事務長の山下平八郎氏に調査を依頼した。資料はなかったが、同盟のことを覚えていた卒業生の可児初男氏を探し当てた。可児氏は大正浪漫夢通りで時計店を営む。彼によれば、分室は二階建ての本校舎1階右端の理科室にあった。武井が描く位置に合う。室内には無線機があり、「入ってはいけない」と言われていた。

分室の記者たち

『かわごえ』は、分室の中の模様を次のように描いている。

「黒板に向かって左隅に、テレフンケンの大型受信機が二台Lの字型にならんで、その前のせまい空間にモニター役のオペレーターが一人腰かけるようになってい。ならんでタイプライターが二台ある。これもそれぞれ一メートルぐらい間があいている。受信したテープを入れた大きな円筒を右に置かなければならないからだ。(中略)少し離れて教室の中央あたりには、四つほどのデスクが向いあって置かれている。受信を主としてこの五月に疎開してきたばかりのこの分室には、記者は三人と見習い程度の婦人記者が一人いるだけなのである」

『かわごえ』に登場する分室記者は、「掛井」、「山下」、「松山」。「山下」は木下秀夫である。木下は日米開戦当時にはニューヨーク支局員で、日米交換船で帰国した。時事通信では編集局長、取締役を務めている。新聞通信調査会には、同盟が解散した後、共同通信や時事通信に行かなかった同盟職員のカード数千枚が残っている。「婦人記者」は、45年8月1日付で川越分室勤務の辞令が出ている外信部記者正木桂子であることが分かった。残る「松山」は誰なのか？特定は難航した。可児氏から、「友人の奥さんの知人のご主人」が同盟川越分室に勤めていたことが分かったと連絡があった。その知人とは杉山昭子さん。連絡を取ったところ、「松山」は元共同記者、杉山市平であった。杉山は40年、東大英文科在学中に召集され、中国で3年半、軍隊生活を過ごした。43年に同盟に入社、外信部に配属される。戦後は、AAジャーナリスト協会の書記として64年からジャカルタ、北京に駐在し、86年に帰国。96年に79歳で亡くなった。

二世タイピスト

武井は分室の二世タイピストの数を「十人足らず」としている。45年7月19日付で連絡局電務部員10人に対し

て、川越分室勤務の辞令がでてい。林初恵、杉山静子、杉山千恵子、三木富子、中沢ユキコ、小篠英子、中本昌子、金子愛子、金子美智子、佐藤万寿子。全員20代の准社員で、43年以降の入社である。電務部のタイピストは坦務上、現波係と呼ばれた。受信機が受信したモールス信号を現波器が紙テープに長短の波形で記録する。これを文字化するのである。

『かわごえ』に登場する「佐藤克子」は、佐藤万寿子である。20年2月、カリフォルニア生まれ。他のタイピストたちは高卒であるが、ロサンゼルスウッドベリー・ビジネス・カレッジを40年に卒業している。同盟には43年10月に入っている。

昭子さんは佐藤のこともよく覚えている。川越に進駐してきた占領軍の通訳を佐藤が務めた時に、名字の日本語の発音が砂糖と同じだと説明したことから、「ミス・シュガー」が彼女のニックネームになった。

『かわごえ』に登場する「リタ・キリノ」に似た名前として電務部には、リタ・ダキノが嘱託としている。川越分室勤務の辞令は出ていないが、リタというタイピストは昭子さんも覚えている。ダキノといえば、戦後「東京ローズ」(太平洋戦争中に日本が米兵に向けて行ったプロパガンダ放送のアナウンサー)にされた戸栗郁子の夫がフィリップ・ダキノである。ふたりは同盟海外部員として、愛宕山受信所で海外放送のモニターをしている時に知り合い結婚した。フィリップの記録は見当たらないが、海外部に一時在籍したテッド・ダキノとリタは兄妹であり、さらにリタの住所は、フィリップの母と祖母が疎開していた厚木であることから、この3人が兄弟妹であることは間違いないであろう。ダキノはポルトガル籍である。

『かわごえ』では、宿舎は最初、「栗林旅館」を使っていたとしている。大手町にあった栗原旅館と思われる。後に男性は駅に近い六軒町の食堂の2階、女性は天理教道場に移った。郭町にも天理教分教会があり、そこかと思われた。問い合わせたが、60年以上前のことは分からなかった。

可児氏が「友人」と言ったのは、商業学校の同級生の宮岡正一郎氏。その夫人元子さんが、川越高等女学校で昭子さんと同じクラスであった。宮岡家は幸町の蔵造り商家街にある刃物の老舗「まちかん」。元子さんの実家は天理教川越分教会で「まちかん」のすぐ裏にあった。同盟のタイピストたちの宿舎はそこだった。現在は「陽気遊山」という休憩所になっている。同盟の女性たちが使

っていたのは、渡り廊下でつながった50畳の道場であった。終戦の年には元子さんは駅近くにあった日清製粉工場に勤めていたので、同盟の二世の女性たちについては、彼女たちが出入りしていたことぐらいしか覚えていない。

ポツダム宣言の受信

『かわごえ』によると、分室で受信していたのは、AP、UP、米国戦時情報局（OWI）の電信放送（いわゆるサンフランシスコ放送）。ロイターについては、同盟は国際電気通信株式会社の福岡受信所（埼玉県福岡村、現ふじみ野市）で専門に傍受していた。愛宕山受信所焼失後に同盟は、独自に世田谷区上北沢の住宅に小規模な受信施設を設けた。そこではロイター、AP、UP、サンフランシスコ放送を傍受していた。

同盟は、ポツダム宣言発表を7月27日午前4時半に受信した。これはロイター電であった。当時、海外局長だった長谷川才次は次のように証言している。

「ポツダム宣言が入電してきたのは、二十七日の午前六時ごろ。最初は電話で川越受信所のキャップだった木下秀夫君（現、時事通信編集局長）が英語で吹き込んできた。一木下氏の話では、そのとき長谷川氏から、君の発音は聞きとりにくいとしかられたという」（『昭和史の天皇 3』68年）

『昭和史の天皇 3』によると、戦時情報局の西海岸の短波送信機は27日午前5時（日本時間）に宣言のテキストの放送を開始しており、川越で受信したのはサンフランシスコ放送ではないかと思われる。

トルーマン原爆投下声明を受信

『かわごえ』は、トルーマン大統領の原爆投下声明を同盟川越分室で受信する光景から始まる。トルーマンの声明が発表されたのは、ニューヨーク・タイムズ（45年8月7日付）によれば、東部戦時時間8月6日午前10時45分（戦時時間は夏時間と同じ）、日本時間午後11時45分。『通信社史』によると、川越分室は7日午前1時半ころ、同声明をキャッチした。長谷川才次は、その時の状況を『終戦前後一週間』（『大平』46年1月号）に記している。

その夜、武井は当直であった。声明が入ると、武井はオペレーターに、自転車で天理教の宿舎に行き、タイピストの佐藤万寿子を起こし、さらに六軒町の宿舎に行き、杉山市平を連れてくるように指示した。武井はホテルに泊っていた長谷川に電話で一報を知らせ

た。佐藤と杉山が現われると、武井はタイプをリタから佐藤に交代させた。杉山を自分のデスクに座らせ、口述翻訳を始めた。

武井は原子爆弾についての事前の知識があったようだ。杉山昭子さんは夫から、“atomic bomb”という単語は武井、杉山の2人で相談して「原子爆弾」と翻訳したと聞いている。翻訳が終わると武井は、杉山に原文と翻訳文を持たせて本社に送りだした。長谷川から電話が入り、トルーマン声明の翻訳を電話ですぐに送るよう指示された。トルーマン声明全文は、政府関係者だけに配布される同盟通信社内情報局分室発行の『（秘）敵性情報』（8月7日号）に翻訳掲載された。

ソ連対日宣戦布告

『通信社史』によると、川越分室は9日午前3時20分、ソ連の対日宣戦布告に関するロイター至急報をキャッチした。長谷川は『終戦前後一週間』で、世田谷分室から4時半ごろ電話でソ連の宣戦布告の第一報が入ったとしている。『かわごえ』によれば、明け方のまだ暗いうちこのニュースが入った。武井は電話をしようとしたが、東京へはなかなか通ぜず、近くの消防署に飛び込んだ。東部防衛司令部を呼び出させようとしたが、「この田舎の消防署の署員たちは、ソ連参戦の意義がさっぱり分からず、ただまごまごしているだけだった」。

当時の川越市消防署は、旧市役所の東隣りにあった。武井は、どこの通信社電であったのか、本社と連絡が取れたかどうか記していない。本社との直通電話が開通したのは、10日過ぎであった。

8月15日の玉音放送は、勤務のある全員と校長、教頭が分室で聞いた。木下は占領軍との折衝に備えて横浜支局長に赴任し、武井が分室の責任者になった。武井や佐藤は川越にやってきた占領軍と市役所などとの間の通訳をした。同盟は45年10月31日に解散するが、分室はその前に撤収となった。

『通信社史』によると、同盟は45年7月に「政府から傍受機構再建の命をうけた」としている。タイピストの辞令日である7月19日が開設日のようにもみえる。『かわごえ』は、分室は5月に疎開してきたとしている。いずれにしても、愛宕山受信所が被災した後だが、可児氏によれば、自分が卒業した43年12月には既に同盟分室があったという。しかし、記録や関係者の証言は残っていない。また、なぜ商業学校が選ばれたのかも謎である。（一部敬称略）

分館だより

— 川越城本丸御殿の近況 —



平成20年10月から約2年半かけて実施した「川越城本丸御殿保存修理工事」が終了し、平成23年3月26日に再公開となりました。3月11日の東北地方太平洋沖地震では、一部の壁に亀裂が入るなどしましたが、建物本体には大きな被害もなく、無事に公開にこぎつけることができました。

公開初日はあいにく肌寒い天候でしたが、たくさんの方々にお集まりいただきました。午後2時に、見学者代表の方2名と博物館長によるテープカットを行いました。5時の閉館まで、わずか3時間の公開時間でしたが、約1,400名もの方にご来館いただきました。

さすがにこれほど多くの方がいらっしやると、広いはずの本丸御殿も大渋滞です。2日目も約2,500名の方にお越しいただきましたが、両日入館されたみなさんには十分なご見学ができなかったのではないかと心苦しく思っています。

さて、最近の本丸御殿は、修理前と同様、小中学生の校外学習や観光ツアーでの入館者が増え始めています。博物館としても本丸御殿を活用した事業を行い、文化財建造物としての川越城本丸御殿の魅力をみなさんに感じていただけるように努めていきたいと思えます。

●平成22年度●

利用状況

博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館

博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも、平成22年度中に、多くの皆様に御来館いただき、誠にありがとうございました。今後も、より多くの方に御満足いただけるよう、常設展示・企画展示の充実を図っていきたく考えています。

皆様の御来館を心よりお待ちしております。

施設区分	年間入館者数				1日平均入館者数	開館日数
	一般	大学生 高校生	中学生 以下	合計		
博物館	44,747	2,243	30,173	77,163	268	288
川越城本丸御殿	7,403	290	976	8,669	1,734	5
川越市蔵造り資料館	46,188	2,452	21,460	70,100	236	297

※川越城本丸御殿は、平成23年3月26日再オープン。

Information

平成 23 年度の博物館行事です。(12 月まで)

講座・教室 etc.

- …一般向け事業 開催日 講座名
- …子ども向け事業 内容 申込み開始日

7月	← 16(土) ~ 第21回収蔵品展 『木工職人の道具と技』	
	●23(土) 野外博物館教室 城郭探訪—忍城と石田堤—	○28(木) 夏休み子ども体験 ミニ灯笼を作ろう 7/5
	○30(土)・31(日) 夏休み遊びの時間 申込不要	
8月	第21回収蔵品展 『木工職人の道具と技』	
	○3(水) 夏休み子ども体験 探検!となりのまちの博物館 7/6	○5(金) 夏休み子ども体験 ミニ弥生土器を作ろう 7/7
9月	~ 19(月) 第21回収蔵品展 『木工職人の道具と技』 →	
	○10(土) 子ども体験教室 布ぞうりを作ろう 9/1	○25(日) 子ども体験教室 風呂敷でラッピング 9/2
10月	← 8(土) ~ 第36回企画展 『名主奥貫友山と寛保2年の大水害』	
	●9・16・23(日) 博物館歴史講座 川越人物伝—戦国時代編— 10/4	●15(土) 野外博物館教室 川越まつりの山車曳き体験 10/5
	○8(土) 子ども体験教室 拓本体験 10/1	○22(土) 子ども博物館教室 川越の文化財探検 10/6
	○30(日) 子ども体験教室 ミニ掛け軸作り 10/2	
11月	~ 23(水) 第36回企画展 『名主奥貫友山と寛保2年の大水害』 →	
	●3(祝) 民俗芸能実演 「川越祭りばやし(今福)」 申込不要	●5(土) 古文書基礎教室 11/1
	●13・20・27(日) 古文書講座 11/5	●26(土) 野外博物館教室 古尾谷八幡神社 11/6
	○12(土) 子ども体験教室 和楽器体験—三味線・琴に挑戦— 11/2	○19(土) 子ども体験教室 茶道体験 11/4
12月	○10(土) 子ども体験教室 たこを作ろう 12/1	○17(土) 子ども体験教室 お正月飾りを作ろう 12/2

※変更の可能性もあります。申込方法も含め、詳細については「広報川越」またはホームページを御覧ください。
お問い合わせは博物館まで。

子ども体験教室・夏休み遊びの時間は、午前10時~11時30分と午後1時30分~3時30分の時間帯で行います。
7/28・8/5の夏休み子ども体験は、午前10時~12時と午後1時30分~3時30分の時間帯で行います。8/3の夏休み子ども体験は、午前9時~午後4時の時間帯で行います。

ガイド

- ◆博物館
平日(開館日)午前11時・午後2時
土・日・祝日 午後11時・午後1時・午後2時・午後3時
※予定を変更させていただく場合もありますので、ガイドを御希望の方は、博物館までお問い合わせください。
- ◆蔵造り資料館
毎月第2日曜日 午前11時・午後2時
※事前のお申し込みはいりません。当日直接おこしください。
- ◆川越城本丸御殿
毎月第3日曜日 午前11時・午後2時
※事前のお申し込みはいりません。当日直接おこしください。

機織り実演・体験

(協力：博物館同好会)

- ◆博物館
毎週火・水曜日
午後1時~3時 華の会(裂き織り)
毎週木・土・日曜日
午前10時~12時・午後1時~3時
川越唐棧手織りの会
※予定を変更させていただく場合もありますので、御希望の方は、博物館までお問い合わせください。



第21回収藏品展

木匠職人の道具と技

平成23年7月16日(土)～9月19日(月)

当館では、川越市や周辺地域の方々から、たくさんの貴重な資料等を寄贈・寄託していただいております。これらの資料を広く公開する場として、毎年収藏品展を開催しております。

今回の収藏品展は「木工職人の道具と技」というテーマで、桶職人や建具職人などの道具を展示いたします。



私たちの生活を豊かにしている様々なものが、どのような道具によって作られているのか、その一端を御紹介いたします。職人の方々の道具を通して、職人の“技”に思いを馳せていただければ幸いです。皆様の御来館をお待ちしております。

第36回企画展 名主奥貫友山と寛保2年の大水害

平成23年10月8日(土)～11月23日(水)

当館では、上記の日程で第36回企画展を開催いたします。

この企画展では、久下戸村名主奥貫友山に焦点をあて、友山の学問・教育や文人交遊、そして、寛保2年(1742)の大水害や、その際に行った友山の救済活動に関する資料等を展示します。



奥貫友山画像(複製品 当館蔵)

利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館(観覧)券			
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館 ●まつり会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円	650円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円	450円

※() 内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合

◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は午後4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日) ※平成23年10月17日・11月14日は開館第4金曜日(休日を除く) 年末年始(12月28日～1月4日)
館内消毒(6月下旬)特別整理期間(12月下旬)

*開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ(館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館、蔵造り資料館は1月2日から開館)

平成23年7月							8月							9月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
3	4	5	6	7	8	9	7	8	9	10	11	12	13	4	5	6	7	8	9	10
10	11	12	13	14	15	16	14	15	16	17	18	19	20	11	12	13	14	15	16	17
17	18	19	20	21	22	23	21	22	23	24	25	26	27	18	19	20	21	22	23	24
24	25	26	27	28	29	30	28	29	30	31				25	26	27	28	29	30	
10月							11月							12月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
2	3	4	5	6	7	8	6	7	8	9	10	11	12	4	5	6	7	8	9	10
9	10	11	12	13	14	15	13	14	15	16	17	18	19	11	12	13	14	15	16	17
16	17	18	19	20	21	22	20	21	22	23	24	25	26	18	19	20	21	22	23	24
23	24	25	26	27	28	29	27	28	29	30				25	26	27	28	29	30	31

●印は、3館休館(博物館、資料館、本丸御殿) ●印は、1館休館(博物館)

交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より

または西武新宿線 本川越駅より

・東武バスにて「蔵のまち経由」乗車札の辻バス停下車徒歩8分、または「小江戸名所めぐり」乗車博物館前バス停下車徒歩0分

・イーグルバスにて「小江戸巡回バス」乗車博物館・美術館前バス停下車徒歩0分

※ 御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。



博物館の最新情報をパソコン又は携帯電話へ配信します

メール配信を希望される方は、川越市ホームページのオンライン「メール配信サービス」から「博物館メール配信」の登録を行ってください。携帯電話では、右のQRコードから登録の手続きができます。随時、最新情報を配信します。

※登録料および情報提供料は無料ですが、インターネット接続やメールの受信などにかかる費用は利用者の負担となります。



編集後記

今回は、61号に掲載いたしました「同盟通信社川越分室」の第二弾になります。元共同通信記者の鳥居様よりご寄稿をいただきました。今後も、川越分室についての情報をお知らせしていきたいと考えています。これからも、皆様からの資料や情報の提供をお願いいたします。

発行日 平成23年7月10日 発行 川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1

TEL049-222-5399 FAX049-222-5396

Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp

ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/